

## イザヤ書50章4-6節 「耳を開かれる主」

### 1A 弟子の舌 4

### 2A 御心への従順 5-6

#### 1B 不退転の決意 5

#### 2B 仕返しをしない方 6

## 本文

イザヤ書 50 章を開いてください。私たちの学びは、48 章まで来ました。午後に 49-50 章を一節ずつ読んでいきたいと思います。今朝は 50 章 4-6 節に注目します。

4 神である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。5 神である主は、私の耳を開かれた。私は逆らわず、うしろに退きもせず、6 打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。

イザヤ書は、キリストの預言の書とも呼ばれています。あまりにも新約聖書のことが、イザヤ書に書かれているので、イザヤ書が本物の預言書なのかどうか批評をする人々がいるほどです。しかし、死海文書などの発見によって確かにキリストの出現前に書かれた書物であることが証明されています。そして 40 章以降、イザヤ書後半部分は、さらに濃厚に、私たちの主イエス・キリストのことが預言されています。キリストが人として現われ、この地上で生き、そして人々の罪の身代わりのために死なれ、甦られることまで預言しています。これをイザヤは実際に起こる 700 年前ぐらいに預言していました。そして今、私たちはキリストの受難を覚える時期に入っています。今年教会歴で、3 月 27 日が復活祭、イースターです。キリストの受難への道を覚えるのに、とても良い箇所を主が聖書通読で与えてくださいました。

そして今読んだ箇所は、「主のしもべの第三の歌」と呼ばれています。詳しいことは午後礼拝で説明しますが、主がどのような方であるかを私たちがじっくり調べることは、とてもわくわくすることです。私たちの主が、ここまでのことをしてくださったのだということを知ることは、私たちの魂を生き返らせ、自分自身が罪を捨て、主に立ち返らなければいけないことを教えてくれます。午後の礼拝にも参加していただけたらと思いますが、ここではそのキリストについての預言が歌として書かれているものの一つだということです。ここの「私」というのは、キリストご自身です。神の御子であられる方が、驚くべきことにしもべの姿を取ってくださいています。私たちと同じようになってくださった。いや、私たち以下になってくださった。私たちはしばしば、自分の願っていることを、欲していることを優先しますが、イエス様は弟子のようになり、神に聞き、この方から学び、そして従う者になってくださいました。このように、主はへりくだってくださいましたからこそ、私たちがこの優しい方、柔和

な方に聞き従い、抛り頼む、この方であって安きを得ることができるということです。

#### 1A 弟子の舌 4

まず 4 節に、「**神である主は、私に弟子の舌を与え**」とあります。イエス様は、ご自身が語られる前に、父なる神から聞いて、それを語っておられました。弟子のように、全く学ぶ者ようになって、そして語られます。メシヤ、キリストの働きとして、神の言葉を与えるということがあります。「49:2 主は私の口を鋭い剣のようにし、御手の陰に私を隠し、私をとぎすました矢として、矢筒の中に私を隠した。」しかし、その語る口はご自身からのものではなく、日毎に父なる神から聞いて、それをご自身のものにして、それから語っておられました。ヨハネ 6 章 38 節にて、イエス様はこう言われました。「ヨハネ 6:38 わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」

そこでイエス様は、日毎に父なる神に聞く方であられました。12 歳であられた時、イエス様は宮の中で教師たちの真ん中に座って、話を聞いたり質問したりされましたが、聞いていた人々は、この方の知恵と答えに驚いていたとのこと。マリヤが、「父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです。」と言ったら、イエス様は、「わたしが必ず父の仕事にいることを、ご存知なかったのですか。(ルカ 2:49)」と言われました。イエス様が、エルサレムにおける律法の教師と互角、いやそれ以上の知恵を持っていたのですが、それはどこから得たのでしょうか？人として、この方も基礎的な学問を習得していたはず。けれども、本質において、イエス様は父なる神からいつも聞き、そうして神の言葉を知っておられたのです。これは、今の小さな子たちへの励ましになりますね。イエス様が少年であられた時に、学校で学び、それだけでなく父なる神から聞いて学んでおられたのと同じように、学校に通いつつも、イエス様から学んでいけばよいのです。

そして、こうあります。「**疲れた者をことばで励ますことを教え、**…」イエス様は、ご自身が肉体を持たれ、私たちと全く同じ精神的な疲れも経験されたことでしょう。しかし、その中で父なる神のところにいき、祈り、そこから御父に聞き、休息を得られたのではないかと思います。その交わりの中で、主は今度にご自身に付いてきている物たちに、疲れを癒す励ましの言葉を語られたのです。主が言われた言葉を思い出します。「マタイ 11:27-29 すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません。すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」

このマタイの箇所を背景を考える必要があります。私たちの日常生活での疲れのさることながら、イエス様は、ご自分の業と御言葉に応答しない町に災いを宣言された後で語られたことです。カペナウム、コラジン、ベツサイダの町が悔い改めなかったので、責められました。そして、ご自身

の元に来ている者たちのことを、父なる神にほめたたえています。つまり、イエス様はご自分の働きが受け入れられないという人々の頑なさを経験されていたのです。また、行なってきたことの報いを受けないという落胆もあったでしょう。そこで、同じようにイエス様のところに付いてきている者たちも、人々の反対を受けることを知っておられました。それで「わたしのところに来なさい。休ませてあげよう。わたしから学びなさい。そうすれば安らぎを与えよう。」と言われました。イエス様は、このようにご自身を卑しめられて、僕の姿を取ってくださったので、私たちと同じ弱さを知っておられます。その上で、父なる神からの安息を私たちに分かち合うことができるのです。

そして、「朝ごとに、私を呼びさまし、私の耳を開かせて、私が弟子のように聞くようにされる。」とあります。主は朝毎に、父なる神から聞く時間を持っておられたようです。朝毎であるかどうかは、福音書に書かれていませんが、イエス様が定期的に父なる神の祈るために退かれたことは書かれています。「ルカ 5:16 しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。」「6:12 このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。」祈りにおいて、主はもちろん多くを父に語られたと思いますが、それ以上に御父から聞いておられたのだと思います。

聖書に出てくる、主の言葉を語る権威を持っていた人々は、必ず主から聞いていた人々でした。モーセを思い出します。彼の言葉と力とはとてつもなく権威がありました。しかし、それは彼自身が主の前に出ていき、祈り、そして主から聞いていたからに他なりません。シナイ山に上がり、数多くのことを主から聞きました。さらに、主にお会いするために天幕を張っていました(出エジプト 33:7-9)。そしてサムエルを思い出します。彼も、幼少の頃から幕屋で仕えて、エリについての主からの声を聞いて、預言者としての働きが始まりました。エリヤもそうです。主からの言葉があったからこそ、二・三人の飢饉があると預言し、またシドンの寡に対して、主からの言葉があったからこそ、残りわずかなパンと油で、まず私にパンを作ってくださいと語ったのです。ですから、主から聞き、そして祈り、そして一体どうなっているのかを見張っている、そのような人が主の言葉を語るができます。

## 2A 御心への従順 5-6

### 1B 不退転の決意 5

そして 5 節を見てください。「**神である主は、私の耳を開かれた。**」これは、主の声を聞くことができるように、耳を開かれたという意味に取ることができます。けれども元々の意味は、「主人の言うことを一生涯聞いていく、奴隷の宣言」でありました。出エジプト記に、主人と奴隷の律法がありました。同じヘブル人の奴隷を買う場合は、七年目には必ず自由の身にしなければなりません(21:1-6)。しかし、奴隷には妻が与えられ、また妻との間に子供も生まれます。七年目に、彼女と子供は主人のもとに置かれます。奴隷は、自分の意志で「私は、自由の身になりたくありません。いつまでも主人に仕えます。」とすることができます。その時に儀式として、奴隷を「戸または戸口の柱のところに連れて行き、彼の耳をきりで刺しとおさなければならない。(6 節)」とあります。なんか残酷だなあと感じるかもしれませんが、いやいや、イヤリングを耳たぶにかけている人は、みな

このことを行なっています。

つまり、主イエスは自ら、ご自身の意志で父なる神に仕えることを選び取られたということです。そして神の命じられることは何でもするという、神への愛に基づいてどんなことがあっても従われることを決められたのです。「私は逆らわず、うしろに退きもせず、」とあります。これは不退転の決意であります。もう後に戻らないと決めているのです。自分が、主からの言葉をそのまま実行する、もう後ろを振り返らないと決めてしまう決意です。けれども、これは全く自発的なもので、誰も強制できません。いや強制するのであれば、それはもはや、人から聞くことになり、主から聞くことにはなりません。使徒たちは、自らを「主のしもべ」と呼びました。例えばヤコブの手紙では、「神と主イエス・キリストのしもべであるヤコブ(1:1)」と語っています。

私たちは、主のしもべになっているでしょうか？ 決めておられるでしょうか？ 自分で決めてしまうからこそ、それが純粋な主への愛の表れとなり、そこにある愛の関係はかけがえのないものになるのです。自分の妻をどのように愛するのか、誰かに言われていないから分からないということ発言したら、滑稽ですね、お笑い物です。「お前が愛しているんだろ、自分で考えろ。」と言われるのが山です。でも、イエス様を愛することについて、主に従うことについて、人から言われたいとやれないということも、同じように滑稽なことなのです。自分の主張や権利を主の前に落とすことは、全く自発的なものであります。

## 2B 仕返しをしない方 6

そして6節、「打つ者に私の背中をまかせ、ひげを抜く者に私の頬をまかせ、侮辱されても、つばきをかけられても、私の顔を隠さなかった。」とあります。これらのことは、すべてイエス様の身に起こりました。イエス様はユダヤ人の裁判において頬を打たれました。侮辱されました。つばきをかけられました。ひげを抜かれたことについては具体的に書かれていませんが、これも行なわれたのでしょう。髭を抜くことは、ただ痛いだけのものではありません。髭は男の尊厳を表していましたから、非常に侮辱的なことです。そして唾も同じです。唾をかけることは、相手を非常に侮辱している行為です。「マタイ 26:67-68 そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、こう言った。「当ててみる。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」そして総督ピラトによって、鞭打ちを受けられました。しかし、最後の言葉が大事です。「私の顔を隠さなかった。」とあります。主イエスは、神の御心がご自身が捨てられること、死に渡されることであることを知っておられたので、その仕打ちに服従されたのです。

旧約の時代には、人々が自分の罪を贖うために、動物のいけにえを幕屋あるいは神殿に携えていました。しかし、自分の携えてくる動物は確かに祭司がほふって、血が流され、そこで罪の赦しが行なわれているけれども、それでも自分自身がそのまま残っていることに気づきます。そのことをすればするほど、かえって罪が思い出されて、その罪を拭ってもらうために再度、いけにえを捧げに行くということを行なっていました。

ところで、主の前に認められる唯一の方法は、身代わりの犠牲によるものです。このことについて、この頃深く考えさせられています。ヨルダンとイスラエルに行き、ムスリムの人たちと話す機会がありました。またユダヤ教徒の人と話す機会がありました。そしてしばらく話していませんが、ここ一年ぐらい、エホバの証人の人たちが駅前で伝道をさらに活発化させていることに気づきます。彼らなりの終わりが近いと考えているからなのでしょう。それぞれの宗教が、「行ないによって天国に行こう」という考えに基づいています。それぞれの罪の取り扱い方を聞くと、とても生易しいものです。行いを積み上げれば、神が良いと認めてくださるだろうという憶測に基づいています。けれども、日本語に「真剣」という言葉がありますが、まことの神、聖書の神と私たち人間の関係は、真剣そのものです。どんなことを行なっても、すでに罪によって引き離された私たちは神のところに到達することができません。神のみが義なる方であり、私たち、どんなにすぐれた預言者であっても、彼らも含めて全てが罪を犯したのです。これが聖書の教えている聖なる神の姿です。

ですから、旧約時代から一貫して神は、罪の赦しによって人々をご自身に引き寄せようとしておられます。その時に数多くのいけにえが捧げられ、血が流されます。ところが、それでも人の心にある罪は取り除けていなかったのです。そこで神は、「ご自身の子に肉体を与えて、その肉体をもって罪の供え物とする」というご計画を立てておられました。「ヘブル 10:5-7 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』」(これは、先ほど読んだ詩篇 40 篇 6-8 節からの引用です。)神の御心が、肉体においてその罪を負われ、その肉体からの血が流されることによって、罪を取り除くというものでした。

イエス様は、この御心を知っておられたからこそ、これらの侮辱に耐え、仕返しをすることを敢えておやめになっていました。再来週、53 章を読みます。そこには、ご自身が罪人とみなされて、死なれ、葬られることが預言されています。しかし、主には将来がありました。それは私たちの罪のために死なれた後に、甦られて、多くの人に義の賜物を与えられるということです。「53:11 彼は、自分のいのちの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を彼がになう。」甦られて、そこに多くの人が救いに導かれているその喜びがあったので、主はご自身の前に置かれている苦しみを耐えることができました。

そして 7-8 節には、主ご自身が受けた侮辱について、ご自身の尊厳を神ご自身に求めておられます。ご自身が恥を見ているけれども、これは御父からの召しのあつてのことであつて、栄誉あることなのです。実に十字架に、神の栄光が現れていたのです。そこで主イエスは、ご自身を義としてくださる神に期待していました。自分で義と認められようとしたのではなく、父なる神にご自身をお任せになりました。確かに、神は死者の中からイエスをよみがえらせてくださって、それでイエス

様が確かに、彼らが「神の子ならば自分自身を救ってみろ」とそしりましたが、確かに神の御子であることが公に示されたのです。

私たちは、この主イエス・キリストに抱かれています。したがって、自分自身に対して生きることを捨てる、このことが最も安きを得る方法なのです。この方に対して生きる、そして自分が受ける仕打ちについては、神が必ず報いを与えてくださいます。自分が正しいこと、神の御心を行なって不正な仕打ちを受けたのであれば、神が必ず報いてくださいます。主なる神は、イスラエルがまことの僕になることができるように、キリストを選ばれました。この方が主のしもべになられることによって、イスラエルも主のしもべとして生きることができるようになりました。同じように、キリストが父なる神のしもべとなられたように、私たちはキリストのしもべとして生きることができるようになっています。私たちと一つになってくださることによって、私たちもキリストにあって神と一つになることができるようにされています。